

共生社会を目指したインクルーシブスポーツの実践

— 教育方法の検討 —

山田 雅之

1. はじめに

我が国では2020年東京パラリンピックの開催に向けパラリンピックスポーツへの関心が高まりつつある。パラリンピックスポーツとは障がい者スポーツにおける一部の種目を示している。我が国においての障がい者スポーツの実践環境の整備には課題も多く残されている。インクルーシブスポーツとは、共生的な社会の実現に向けて障がいの有無や程度にかかわらず多様な人々が共に実施できるスポーツを指す。障がい者スポーツは大学におけるスポーツ実技授業にも広がりつつあり、多くの実践がなされるようになってきている。こうした背景からインクルーシブスポーツをどのような方法で実践すべきかの実践事例の共有が求められていると言える。

大学教育では多様な配慮を必要とする学生に対して支援の実施がなされ始めている。健常者と障がい者が互いに理解を深め、共に学ぶための機会の増加が求められる。スポーツ実技授業においては今後求められる共生社会の実現に向けて、スポーツを誰とでも共に楽しむための素地を作る機会として期待ができる。

本研究では大学スポーツ実技授業においてインクルーシブスポーツの理解を深める授業方法について検討した。

2. 目的

本研究は著者がこれまで授業内外で実施・体験してきた障がい者スポーツについて概観し、その後フットサルの授業におけるインクルーシブフットボールの教育方法について検討する。具体的にはジグソー法を用いたインクルーシブフットボール授業の実践事例を紹介

介し、今後の教育方法の課題について検討した。

3. 障がい者スポーツの体験と授業の概観

障がい者スポーツは障がいの種類や程度によって多様な種目に分かれている。例えばサッカーであれば、日本サッカー協会の関連団体として日本障がい者サッカー連盟^[1]があり、日本障がい者サッカー連盟は7つの障がい者サッカー団体の意見集約とサポートを実施している。同連盟の理念の中にも共生社会の創造への貢献が挙げられているが、スポーツによる共生社会への貢献は大きいと考えられる。同連盟では各競技団体のニュースの発信の他、インクルーシブフットボールコーチの資格登録制度を整備したり、インクルーシブフットボールのイベントを開催することでその活動は広がりを見せている。

本章では著者が実践してきた車椅子バスケットボール・シッティングバレーボール・ブラインドサッカーの授業について概観し、授業実践には至っていないものの、体験した障がい者スポーツについても紹介していく。

・車椅子バスケットボール

車椅子バスケットボール^[2]はA大学のスポーツ実技系のバスケットボールの授業の一部として実践した。授業では車椅子バスケットボールの現状を概説し、それぞれの学生がボールなしでの動き、パス、ドリブル、シュート等を体験した。概ね30分程度の時間であったが、普段授業でバスケットボールを経験している学生が車椅子でのシュートやドリブルの巧みさについて学習する機会となった。学生数は10名程度で、車椅子バスケットボール用の車椅子は5台で実施した。車椅子バスケットボールは東京2020パラリンピックでも実施される。

・シッティングバレーボール

シッティングバレーボール^[3]はB大学のスポーツ実技系のバレーボールの授業の1コマとして実施した。学生数は50名程度で3面のバレーボールコートを用いた。ネットの高さを調整し、コートの広さもマーカーなどを用いて調整した。授業では初めにシッティングバレーボールのルール等について概説したのち、6チームに分けパスの練習を実施した。その後総当たりでのゲーム（5試合）を実施した。授業では、通常のバレーボールよりも

楽しいという声も聞かれた。シッティングバレーボールは東京2020パラリンピックでも実施される。

・ブラインドサッカー

ブラインドサッカー^[4]はスポーツ実技系のフットサルの授業の一部として実施した（図1）。授業ではペアを作り、初めは一人が目隠し、一人が正眼の状態で腕を持って歩行し、その後正眼者が少し離れたところから拍手や声の指示によって自身のとこまで歩くサポートをする形のアクティビティを実施した。その後、ボールを手や足を使ってパスをキャッチしたり、手のなる方向へパスをするアクティビティを実施した。これらのアクティビティは日本サッカー協会等が実施している障がい者サッカーの体験を参考にプログラムした。ブラインドサッカーは東京2020パラリンピックでも実施される。



図1 ブラインドサッカーの様子
（写真は実験時の様子）

・パラアイスホッケー、ゴールボールの体験

大学の授業としては実施していないが、著者がこれまで体験した2つの障がい者スポーツの体験プログラムを概観する。

パラアイスホッケー^[5]は氷上でスレッジと呼ばれるそりに乗り実施するゴール型のゲームである。パラアイスホッケーの体験は愛知県におけるチーム設立に合わせ体験会が実施された（図2）。大学においてはスケートを実習として実践している授業もあると考えられる。障がい



図2 パラアイスホッケーの様子

者スポーツのへ理解としてスケーティングやパス、シュート、ゲームなどの授業プログラムの実践可能性が高い。体験会では転んだ状態から立つ練習から始まり、スケーティングやゲームを体験した。

ゴールボール^[6]は著者が日本教育工学会の2017年度冬の合宿研究会^[7]で選手を招いて体験を実施した。体験ではブラインドサッカー同様、目隠しの状態で歩く練習をした後、ボールを使つてのパス回し、その後ゲームを実施した。ゴールボールは音の鳴るボールと目隠しを用意することで体験プログラムを検討することが可能となる。大学の授業においてもニュースポーツやレクリエーションスポーツといった授業においての実践を検討可能だと考えられた。ゴールボールは東京2020パラリンピックでも実施される。

4. 大学フットサル授業におけるジグソー法を用いたインクルーシブフットボール

前章では、大学における多様な障がい者スポーツの実践について検討した。健常者が障がい者スポーツに触れる機会を増加させると共に、多様な人々が共にプレーするインクルーシブスポーツへの理解を深めていく必要があると考えられる。世界最高峰のフットボールクラブの一つであるFCバルセロナはその活動の一つとしてバルサ財団のFutbolnetの活動を実施している。そこではスポーツを通じた共生社会の実現に向けた指導者の育成や子供達への働きかけが実施されている^[8]。我が国においても日本サッカー協会や日本障がい者サッカー連盟はインクルーシブフットボールフェスタを毎年開催し、誰でも参加ができる「ウォーキングサッカー」が実施されている。ウォーキングサッカー^[9]はイングランド発祥と言われ、シニア世代を中心に広がりを見せている。ルールは・歩行で実施する。・ボディコンタクト禁止。・アウトボールはキックインもしくはアンダースロー。・フットサルコートの広さ。・8人制を基本。・1.8m以上ボールを上げない。・ペナルティエリア内フィールドプレーヤー侵入禁止（逆にGKはエリア内のみ）。・7分ハーフ。・ローバウンドボールを使用。となっている。本章ではまず日本障がい者サッカー連盟の7つの競技団体について概観し、その後大学におけるジグソー法を用いたインクルーシブフットボールの授業案を紹介する。

4.1 障がい者サッカー競技団体

日本障がい者サッカー連盟の7つの競技団体とは日本アンプティサッカー協会・日本CPサッカー協会・日本ソーシャルフットボール協会・日本知的障がい者サッカー連盟・日本電動車椅子サッカー協会・日本ブラインドサッカー協会・日本ろう者サッカー協会である。

アンプティサッカーは切断障がいの方を対象としたサッカーである。CPサッカーは脳性麻痺の方を対象とした7人制のサッカーである。ソーシャルフットボールは精神障がいの方を対象としたフットサルである。知的障がい者サッカーは知的障がい者を対象としたサッカーである。電動車椅子サッカーは重度障がい者等を対象にした電動車椅子を使用したサッカーである。ブラインドサッカーは視覚障がいの方を対象にしたサッカーである。ブラインドサッカーには全盲で実施するサッカーとロービジョン（弱視）フットサルがある。デフサッカーは聴覚障がい者を対象としたサッカーである。

4.2 ジグソー法を用いたインクルーシブフットボールの授業案

本研究では障がい者サッカーに対しての理解を深めると共に大学生が共生社会について検討し、誰でも共に楽しめるサッカーのルールについて考えるための授業としてジグソー法を実施した。

ジグソー法は、グループが組み変わるタイプの協調学習である。元々は学習者同士がお互いに協力し、尊重しあって問題解決に取り組む手法として実施されてきた^[10]。主体的・対話的で深い学びが求められる今日において、我が国でも多くの自治体でなされるようになってきている。東京大学 CoREF^[11]が中心となり、知識構成型ジグソー法と呼ばれる手法を用いた授業では学習者が知識を創造し、今後求められる資質能力の育成を目指した取り組みが実施されている。本研究でもこうしたジグソー法の手法を参考に、共生社会を目指したインクルーシブスポーツについての理解を深める体験型のジグソー法を実践した。

4.2.1 小規模実験

本研究では大学での授業に向けて、ジグソー法を用いた小規模実験を実施した。実験は大学生10名を対象に大学での授業を想定し90分を目安に実施した。

小規模実験の目的は多様な障がい者フットボールを体験し、共生的な社会の理解および創造に向けて考える授業実践へ向けてのケーススタディであった。実験は以下の手順で実施した（表1）。

表1 実験のプロトコル

目安時間	内容	
0分-5分	意義の説明	
5分-15分	ブラインドサッカー体験	
15分-35分	デフサッカー体験	ロービジョンフットボール体験
35分-50分	ルールについての話し合い	
50分-80分	各グループ10分の実践	
80分-90分	ウォーキングフットボール体験	
実験後	アンケート	

- (1) 初めに本実験の意義である、共生社会やインクルーシブスポーツについて5分程度概説した。
- (2) 次にブラインドサッカーの体験として前章にも記述した歩行やパスをそれぞれの学習者が体験（10分）した。
- (3) この後2つのグループに分けエキスパート活動（20分）を実施した。1つのグループはデフサッカーを体験し（図3）、もう一つのグループはロービジョンフットボールを実施した。デフサッカーの体験では、5名中4名が簡易的な耳栓をした上でイヤーマフを着用していた。同グループは1名のイヤーマフをしていない選手に多様な形のパスアンドゴーのドリルを指示し、それをグループ内のイヤーマフをしている他の選手に伝える形式で交代しながら実施した。ロービジョンの体験では専用のキット^[12]を用いて実施した。体験ではパスとドリブルを中心に見え方の異なる多様なロービジョンを体験した。
- (4) ジグソー活動は10名を3つのグループに分けて実施した（15分）。まず問いとして「ロービジョン・聴覚障がい・健常者が共に実施できるインクルーシブスポーツのルールを考えてみよう」が与えられた。各グループはそれぞれ自身の体験した障がい者サッカーの経験を伝え合い、その上でどのような点に注意し、どんなルールのスポーツで



図3 デフサッカーの様子

あれば共に楽しむことが可能であるかについて検討し、実際に体を動かしながらオリジナルのインクルーシブスポーツのルールについて話し合った。

- (5) グループ活動の後に各グループ10分間でその他の2グループの人に対して自分たちの考えたインクルーシブスポーツのルールを説明し、実際に実施した。各グループの実施後には全員でその時やってみたスポーツをより良くするためにどのようなルールがあり得るかについて議論した。

- (6) 最後にインクルーシブスポーツとしてウォーキングフットボールを全員で実施(10分)した。

実験では実践後に以下のアンケートをGoogleフォーム^[13]を用いて実施した。

- ・ 楽しさ (5件法) 1. 全く楽しくなかった。から5. とても楽しかった
- ・ 満足度 (5件法) 1. 全く満足できなかった。から5. とても満足だった
- ・ 共生社会に向けて考えたこと (自由記述)。上記を考えた理由 (自由記述)。どんな場面でどんなことを学んだか (自由記述)。

実験から以下の3点が考察として得られた。

- (1) 各グループが考えた種目がフットボールと離れてしまう場合が多いこと。今回の問いは「ロービジョン・聴覚障がい・健常者が一緒にやれるインクルーシブスポーツのルールを考えてみよう」であった。こうしたグループワークでは指導者の出す問いが非常に重要と言える^[14]。本実験では無理にフットボールにせず実施したが、3グループ中2グループがゴルフのような形式のターゲット型のゲームを提案した。もう1グループはサッカー型のゲームを提案したが、3つがバラバラになってしまった。お互いに議論からの学習はあったが、もう少し問いを絞り、サッカーに限定することで、3つのグループの意見を持ち寄りより良いルールを考えること (いわば知識の統合) ができると考えられた。
- (2) 上記のように3つのグループがそれぞれ多様な形式のスポーツを実施するため、時間がかかりゲームを楽しむ時間が減少してしまった。そこで上記考察にもあるように、問いをサッカーに絞り、各グループが発表するのをルールだけにし、それらの良いルールを統合したゲームを一つ実施することでゲームを楽しむ時間も確保できると考えられた。
- (3) アンケートは6名の回答が得られた。実験後のWebでの回答であったため全員の回答を得ることはできていない。6名の楽しさ・満足度に関する回答は両者とも4.67と

高い結果となった。これらの結果から大学生がインクルーシブスポーツを体験し、それについて考えることを楽しみ、満足している様子が示唆された。自由記述のアンケートでは、「出来ないことがどう出来ないかは、体験してからではないと健常者にとって考えにくかった。逆に言えば、体験して知ることで、相手を思いやれると感じた。」「健常者と様々なタイプの障害を持った方々が混ざってなにか1つのことをしようとした時にみんなが完全に納得して満足できる方法で、1つのものを達成できるか考えた時にとっても難しいと思った」「色々な人がいる中でスポーツをするということを考える場面で、実際やってみてからではないと分からない点があることを知り、その都度改善していくことが大切だと学んだ。」「自分が思う以上に体が思うように動かないのは大変なことだということを学んだ。」「皆が平等にプレーする権利があり、チームメイトの特性を把握してそれぞれの個を尊重し、協力してプレーすることが重要だと思った。」と言った意見が見られた。これらの回答からインクルーシブスポーツの体験とルールについての議論の活動が考えるきっかけを作っていける可能性を示唆していると考えられた。

本研究では上記の小規模実験の結果を受け、大学の授業における実践へとつなげた。

4.2.2 大学スポーツ実技授業における体験型のジグソー法を用いたインクルーシブフットボールの実践

本実践はA大学のスポーツ実技授業「フットサル」において実施した。当日の参加者は30名程度であった。授業は体育館、バスケットボールコート2面で実施した。時間は90分であった。準備として、ブラインドサッカーボール (5個)、目隠し用アイマスク (人数分)、簡易耳栓 (人数分)、イヤーマフ (3個)、アンプティ (3セット)、ロービジョンキック (3セット) を用意した。本授業の実践計画は表2の通りである。

表2 実践プロトコル

目安時間	内容		
0分-5分	意義の説明		
5分-15分	ブラインドサッカー体験		
15分-35分	デフサッカー体験	ロービジョンフットボール体験	アンプティサッカー体験
35分-50分	ルールについての話し合い		
50分-60分	各グループルールの発表と全体での統合		
60分-90分	統合ルールでのインクルーシブフットボールの実践		

- (1) 授業では初めに共生社会の創造が急務であり、障がいの有無や程度に関わらずスポーツを共に楽しむインクルーシブスポーツについて概説した。また今日の問い「多様な障がいを持つ方と健常者が一緒にサッカーをやるためのルールを考えましょう」を学習者に伝えた。
- (2) ブラインドサッカーの体験として、目隠しでの歩行・パスをそれぞれの学習者が体験した。
- (3) 10名程度の3グループに分け、それぞれデフサッカー・アンプティサッカー・ロービジョンフットボールをエキスパートグループとして体験した。それぞれのグループでは各学習者が順番にパスやドリブルなどを体験し、サッカーをする上で注意すべき特徴はどんな点かについて検討した。
- (4) グループを組み替え、それぞれの体験者が同じ割合で入るような3グループを形成し、それぞれの障がい者サッカーの特徴を発表した上で、今日の問い「多様な障がいを持つ方と健常者が一緒にサッカーをやるためのルールを考えましょう」について議論した。本実践では具体的にロービジョンの選手が1名、デフの選手が1名、アンプティの選手が1名、その他健常者が数名いるチーム同士で試合を実施することを想定し、ルールについて検討した。
- (5) 各グループは議論の中で出てきたルールを発表し、3つのグループが発表した後、他に必要そうなルールを追加して統合ルールのインクルーシブフットボールを総当たりで実施した。

結果として本実践ではウォーキングサッカーのルールをカバーするようなルールのサッカーが実施され、実験では課題であった実施時間についても、統合ルールで総当たりの試合を実施するだけの時間を確保できた。

5. 課題と展望

本研究では著者がこれまで実践・体験してきた障がい者スポーツについて概観し、その後フットサルの授業におけるインクルーシブフットボールの教育方法について検討した。検討の結果から、体験型のジグソー法を実施することで、大学生はウォーキングサッカーのルールをカバーするようなルールのサッカーを考えることが可能であることが示唆された。一方で本実践の結果は一事例に限られており、今後もこうした実践を積み重ねていく

中で大学生がインクルーシブスポーツを体験的に学習していく方法について検討を続けていきたい。またこれらの活動の中で各学習者が学びを深めている様子についても検討を進めていきたい。

謝辞

本研究は全教連課題研究「スポーツにおける「主体的・対話的で深い学び」実践プログラムの検討と評価手法に関する調査研究」の一部として実施いたしました。記して感謝いたします。実践にご協力いただきました大学の皆様には大変感謝しております。ありがとうございました。

【引用文献】

- 【1】 日本障がい者サッカー連盟.
<https://www.jiff.football>. (2019年12月7日確認)
- 【2】 日本車椅子バスケットボール連盟.
<https://www.jwbfg.jp>. (2019年12月7日確認)
- 【3】 日本パラバレーボール協会.
<http://www.jsva.info>. (2019年12月7日確認)
- 【4】 日本ブライドサッカー協会.
<http://www.b-soccer.jp>. (2019年12月7日確認)
- 【5】 日本パラアイスホッケー協会.
<http://sledgejapan.org>. (2019年12月7日確認)
- 【6】 日本ゴールボール協会.
<http://www.jgba.jp/index.html>. (2019年12月7日確認)
- 【7】 日本教育工学会「2017年度冬の合宿研究会「スポーツ，サイエンス，テクノロジー，そして教育へ」」(2018).
<https://www.jset.gr.jp/study2/20180127.html>. (2019年12月7日確認)
- 【8】 FC Barcelona.
<https://foundation.fcbarcelona.com>. (2019年12月7日確認)
- 【9】 日本ウォーキングサッカー協会.
<https://j-wfa.jp>. (2019年12月7日確認)
- 【10】 Aronson, E. & Petee, S. (1996). “The jigsaw classroom” New York.
- 【11】 東京大学 CoREF.
<https://coref.u-tokyo.ac.jp>. (2019年12月7日確認)
- 【12】 日本ライトハウス「ロービジョン体験キット」
<http://www.lighthouse.or.jp/iccb/items/lowvisiontaikenkit/>. (2019年12月7日確認)
- 【13】 Google フォーム.
https://www.google.com/intl/ja_jp/forms/about/. (2019年12月7日確認)
- 【14】 山田雅之 (2016)「日本教育大学院大学における知識構築活動の支援を目指した授業デザインの検討」教育総合研究：日本教育大学院大学紀要第9巻